

メタファーによる語りと示し

— メタファーの社会学的分析に向けて —

林 原 玲 洋

1 序論：課題の設定

「政権が発足してからの半年間は、仮免許の期間で、いろいろなことに配慮しなければならず、自分のカラーを出せなかった。これからは本免許を取得し、自分らしさをもっと出し、やりたいことをやっていきたい」(NHK 2010)。この発言は、就任半年ほどの菅直人首相〔当時〕が、支持者のまえて語ったとされる言葉である。おそらくこの発言の意図は、「これからは本免許」という後半の部分にあったのだろう。だが、この発言が報道されるや、野党各党は前半の「仮免許」という部分に反発した。「仮免許で政権を運営されてはかなわない」(自民党・小坂憲次参院幹事長〔当時〕)、「むしろ鳩山内閣時代の副総理の期間が仮免許だったのではないか」「即刻免許を返上すべきだ」(公明党・山口那津男代表〔現職〕)と非難したのである。また、ネットでは「むしろ無免許だ」といった反応もみられた。

「仮免許」発言が、「政権の運営」を「自動車の運転」に喩えるメタファー（隠喩；metaphor）になっていることは、日本語の母語話者であれば誰でも見てとることができるだろう。われわれが国語科の時間に学ぶメタファーは、詩歌や小説をはじめとする芸術的な文章に登場し、送り手が意図したことをより印象的に表現する手段、といった位置づけであった。だが、「仮免許」発言の事例が象徴的に示すのは、きわめて日常的なメタファーが、送り手の意図を越えて解釈され、ときに多くの受け手を巻き込むコミュニケーションへ展開していく、ということである。

コミュニケーションにおいてメタファーが果たすこのような機能は、欧米のディスコース研究では以前より注目されており、すでに多くの研究が蓄積されている（第3節を参照）。一方、日本の社会学者は、これまであまりメタファー

に関心を持ってこなかった。正確に言うと、研究対象としてのメタファーには、あまり関心を持ってこなかった。たしかに、社会学理論の前提条件となる社会観（全体社会や相互行為のとらえ方）がどのようなメタファーに依拠しているのか、といった方法論的な議論はある（厚東 1991）。だが、メタファーに着目して社会を分析するという研究は手薄であった。研究者によるメタファーの用法はしばしば反省されてきたが、当事者によるメタファーの用法は十分に観察されてこなかったのである。

そこで、本稿では、メタファー分析（メタファーに着目したコミュニケーションの分析）が、どのような意味で「社会的」でありうるのかを検討する¹⁾。

2 メタファー：述定表現のレトリック

はじめに、本稿の研究対象であるメタファーとはなにかを確認しておこう。図式的に整理すると、メタファーはメトニミー（換喩；metonymy）とならぶ転義（比喩；trope）の一種であり、転義は論法とならぶレトリックの一種である（図1）。

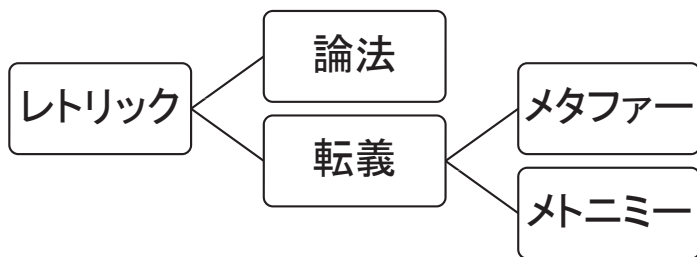


図1 レトリック・転義・メタファー

このうち、「レトリック」および「論法」については、別の機会に論じてきたので、そちらを参照されたい（林原 2003, 2010, 2011a）。結論だけ述べると、「レトリック」とは「日常言語の論理（反駁可能な主張と理由のつながり）を支える言語的な技術」であり、「論法」とは「接続表現のレトリック」である。では、転義とは、そして、メタファーとは、どのようなレトリックであるのか。

古典的なレトリック論では、転義とは「ある語が意味するものを意味するために、べつの語を転用すること」であり、「メタファー」とは「類似性にもとづく転義」とであると定義される。また、類似性のほかにどのような転用の原理を数えるかにより、メタファーとは異なるタイプの転義が類型化される。しばしば挙げられるのは、隣接性（全体-部分関係 [空間的隣接性] や前後関係 [時間的隣接性]）にもとづく転義であるメトニミー、包摂性（類種関係）にもとづく転義であるシネクドキ（提喩；synecdoche）、そして、否定性（矛盾関係）にもとづく転義であるアイロニー（反語；irony）である。

たとえば、①「月見うどん」という表現はメタファー、②「赤ずきん」という表現はメトニミー、③「花見」という表現はシネクドキ、そして、④「ご挨拶 [だな]」という表現はアイロニーの例である。つまり、「月見うどん」は、月と卵の黄身（雲と卵の白身）が類似していることに、「赤ずきん」は、童話の主人公がいつも赤ずきんを着用していることに、「花見」は、桜が花の一種であることに、「ご挨拶」は、丁寧な挨拶と失礼な挨拶が正反対であることに、それぞれもとづくわけである。

以上4種類の転義の関係については、古来よりさまざまな議論がおこなわれており、いまだ決定的な説はない。だが、シネクドキ（包摂性）はメトニミー（隣接性）の一種とされることが多く、また、アイロニーを転義とする立場には異論が多い。そのため、伝統的には、メタファーとメトニミーを二大転義とする説が有力である。とりわけ、R・ヤコブソンが、メタファーとメトニミーを、言語の二大原理である連合（paradigme^[F]）と連辞（syntagme^[F]）に関係づけて以来（Jakobson 1963=1973）、二大転義説は広く支持されている。本稿の主題は転義そのものではないので、この点にはこれ以上立ち入らずにおこう。

伝統的な「メタファー」の定義は、上記のような表現例とあわせて読めば、それなりに理解できるものである。だが、この定義には、しばしば指摘される問題点がある。それは、類似性という原理が、つきつめて考えると無内容にならざるをえないという点である。たとえば、「炎の [ごとき] 氷」という表現は、メタファーの例と読むことができるが、「炎」と「氷」がどのような点で類似しているのかは、一見したところ定かではない。単に連想したという以上の説明を、類似性という原理は与えていないのである。

ここで、多くの研究者は、類似性の認識がどのようにおこなわれるのかという点を考慮して、「メタファー」の定義を試みてきた。だが、そのような議論に立ち入ることは、本稿の目的にとって得策ではない。類似性の認識についてあらかじめ仮説を立てることなく、いますこし端的に研究対象を見定めることはできないだろうか。本稿では、橋元良明（1989）のメタファー論を参考に、以下のように考えることにしよう。

まず、「転義」を「命題表現のレトリック」と定義する。命題とは、ある対象を指し示す指示（reference）と、指示された対象の属性（性質や関係）を述べる述定（predication）の組みあわせである。たとえば、「胎芽（embryo）が中絶される（be aborted）」という命題は、中絶されるもの（胎芽）を指示したうえで、それが中絶されるということを述定している。一方、おなじ命題を、中絶反対派ならば、「胎児（fetus）が殺される（be killed）」と表現するだろう（Condit 1990）。生命尊重（プロライフ）という中絶反対派の議論にとっては、「胎芽」よりも「胎児」という指示表現の方が、また、「中絶される」よりも「殺される」という述定表現の方が適しているからである。このように、おなじ命題に対して複数の表現（指示表現や述定表現）が可能であるとき、その選択はレトリックとして機能する²⁾。これを本稿では「転義」と呼ぶことにする。

つぎに、「メタファー」を、「ある述定表現をデフォルトではない対象について用いる転義」と定義する。また、認知言語学の用語法にならって、メタファーにおけるデフォルトの対象を「ソース（喩えるもの；source）」、デフォルトではない対象を「ターゲット（喩えられるもの；target）」と呼ぶことにする。たとえば、「○○が沈む」という述定表現を考えよう。通常の文脈では、「○○」の部分には、水面に沈む物体、たとえば「船」が該当するだろう。つまり、「船」は「沈む」という述定表現のデフォルトの対象（ソース）である。ここで、「○○」の部分にデフォルトではない対象（ターゲット）、つまり、水面に沈む物体ではないものを代入すれば、メタファーが得られる。たとえば、「太陽が沈む」「気分が沈む」「景気が沈む」は、メタファーの例となる。これらは、「船」をソースとし、「太陽」「気分」「景気」をターゲットとするメタファーということになる。

ところで、「沈む」は用言であるが、体言を用いた述定も同様である。たとえば、「あの男は犬だ」という命題表現は、「○○は犬だ」という述定表現におけるデ

フォルトの対象が、犬の個体（たとえばハチ公）や亜種（たとえばチワワ）であって、人間（あの男）ではないため、メタファーの例となる。そのほか、「沈んだ気分」のような修飾用法のメタファー、「白雪姫」のような対象指示型のメタファー、そして、命題表現全体がメタファーとなる諷諭など、より詳細なメタファーの形態論を考えることもできるが（橋元 1989: 146-50）、本稿ではこれ以上立ち入らずにおこう。

3 メタファーによる語り：主題の焦点化と背景化

前節で定義したように、さしあたりメタファーは、個々の文（命題表現）に関わる現象である。一方、コミュニケーションは、個々の文を越えた、よりおおきな言語単位である。では、欧米のディスコース研究において、メタファーが着目されているのはなぜか。それは、メタファーが体系性を持つから、すなわち、ある述定表現が選択されるとべつの述定表現もまた選択されやすくなるからである。

メタファーの体系性を説得的に示したのが、認知言語学者のG・レイコフらが提唱した概念メタファー論である（Lakoff & Johnson 1980=1986）。レイコフらは、日常言語に広く浸透している慣習的なメタファー群が、より基本的な概念メタファーによって体系的に動機づけられていること、また、芸術的なメタファーも、その延長線上において機能していることを、豊富な事例をもって説得的に論じた。

たとえば、時間を「借りる」「浪費する」「節約する」といったメタファー群は、すでに慣習的なものになっているが、これらが「時間＝金」という概念メタファーによって動機づけられていることは、理解しやすいところであろう。このような日常的表現を背景とするからこそ、「時間銀行」や「時間泥棒」（M・エンデ）といった文学的表現もまた、生きてくるのである。

近年、概念メタファー論は、コーパス言語学や批判的ディスコース分析と交差しつつ、「批判的メタファー分析(critical metaphor analysis)」（Charteris-Black 2004）とも呼ばれる、ひとつの研究領域を形成している。その分析手順は、以下の三段階に整理できるだろう（図2）。

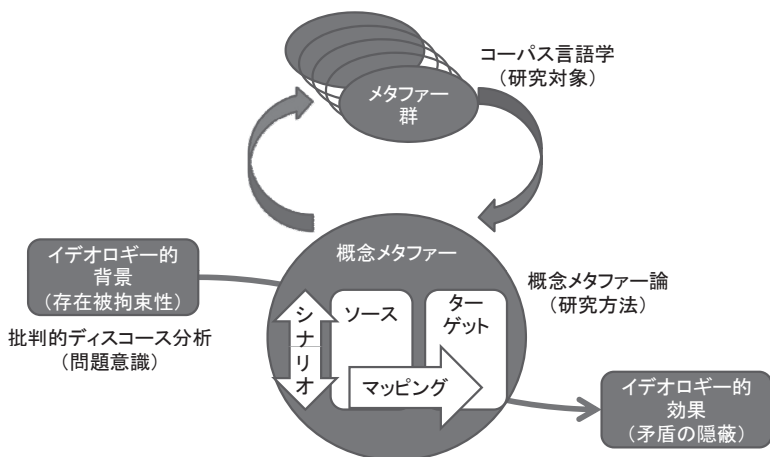


図2 批判的メタファー分析の枠組

第一段階では、分析対象となるディスコースを収集し、そこにみられるメタファーを同定する。メタファーの同定については、その基準が曖昧であったり、調査者によって結果にバラツキがあったりする、という問題点が指摘されてきた。だが、コーパス言語学的发展にともなって、より明示的な原則にもとづき、結果の個人差が少なくなる（または個人差を統計的に評価できる）ような同定手続が、近年提案されるようになってきている。たとえば、R・ギブズらの研究グループは、“MIP”という汎用性の高い同定手続を提案している（Pragglejaz Group 2007）。

第二段階では、同定されたメタファー群を意味的なまとまりに応じて分類し、その体系性を動機づける原理を推定する。このとき、すくなくとも2種類の原理を考えることができる。

第1の原理を、認知言語学の用語法にならって、「メタファー・マッピング（metaphor mapping）」または単に「マッピング」と呼ぶことにしよう（Lakoff & Johnson 1980=1986）。第1節で引用した「仮免許」発言は、「政権」を「自動車」に喩えると同時に、「首相」を「運転手」に喩えるものであった。このように、メタファーは、ソースとターゲットを単発的に対応づけるわけではなく、ソー

スの集合（ソース領域：source domain）とターゲットの集合（ターゲット領域；target domain）を体系的に対応づけるのである。この対応関係を「マッピング」と呼ぶ。公明党による「副総理の期間が仮免許だったのではないか」という発言は、マッピングを活用した批判といえるだろう。「これまでは仮免許」ということが述定されるソース（見習い運転手）に対応するのは、「首相」ではなく「副首相」ではないか、というわけだ。

第2の原理を、A・ムゾルフにならって、「メタファー・シナリオ（metaphor scenario）」または単に「シナリオ」と呼ぶことにする（Musolf 2006）。「仮免許」発言の意図は、おそらく「これからは本免許」という部分にあった。だが、「これからは本免許」という述定表現は、「これまでは仮免許」という述定表現と、不可避的にセットになるものである。このように、メタファーにおいてターゲットと対応づけられるソースには、通常複数の述定表現が結合しており、それらは物語のような構造を持っている。この構造を「シナリオ」と呼ぶ。自民党による「仮免許で政権を運営されてはかなわない」という発言は、シナリオを活用した批判といえるだろう（かりに菅元首相が「仮免許」という表現を用いなかったとしても、「本免許」という表現は、同様に批判されたであろう）。

ところで、マッピングやシナリオによって生じるメタファーの体系性は、主題のある側面を焦点化（前景化）し、べつの側面を背景化（後景化）するという機能を持つ。たとえば、「政権の運営」を「自動車の運転」に喩えることは、政権運営にも慣らし期間があること（ソースとターゲットの類似性）を焦点化する一方、そもそも首相には資格試験がないという事実（ソースとターゲットの差異性）を背景化してしまうだろう。メタファーを選択することは、なにを語り／なにを語らないかの選択でもあるのだ。メタファーの体系性が持つこのような機能を、本稿では「メタファーによる語り」と呼ぶことにする。

批判的メタファー分析の第三段階では、メタファーによる語りの機能が、イデオロギー的な背景（存在被拘束性）や効果（矛盾の隠蔽）に照らして分析される。

たとえば、レイコフは、「国民」をターゲットとするメタファーのソースとして「子ども」を選択するとき、①保守は「政府」のソースとして「父親」を選択し、「厳格である」といった述定表現を用いる一方、②リベラルは「政

府」のソースとして「母親」（より現代的には「両親」）を選択し、「慈しむ」といった述定表現を用いる傾向にあるという分析結果を示している（Lakoff 1996=1998）。これは、マッピングのイデオロギー的な背景・効果を分析した研究といえるだろう。

また、ムゾルフは、「ヨーロッパ」をターゲットとするメタファーのソースとして「パートナー関係」を選択するとき、① EUに否定的なイギリスでは、不安定な「恋愛関係」のシナリオを活用して、関係の崩壊を示唆する述定表現が用いられる一方、② EUに肯定的なドイツでは、安定した「婚姻関係」のシナリオを活用して、関係の継続を示唆する述定表現が用いられる傾向にあるという分析結果を示している（Musolf 2006）。これは、シナリオのイデオロギー的な背景・効果を分析した研究といえるだろう。

4 メタファーによる示し：論者と聴衆の同一化

メタファー分析は、どのような意味で「社会的」でありうるのか。これが本稿の問いであった。批判的メタファー分析の枠組は、この問いに一定の答えを与えるものである。つまり、メタファーによる語りの分析を通じて、社会集団間のイデオロギー的なコンフリクトを解明すること。これがメタファー分析の社会的な意義であるということになる。

だが、この答えは、メタファー分析に副次的な意義しか与えない。最終的な目標がイデオロギーの分析にあるならば、たとえばT・アドルノのFスケールのように、より直接的な指標を開発した方が、話をはやいだろう。メタファー分析の社会的意義を問うためには、メタファーに着目しなければ分析できないこと（または、メタファーに着目することで、よりよく分析できること）とはなにか、これを示す必要がある。

ここでヒントになるのが、飲酒運転問題を構築主義的に分析した、J・R・ガスフィールドの研究である（Gusfield [1976] 2000）。まずはその概要を、筆者なりの解釈にもとづいて紹介しよう³⁾。

ガスフィールドが分析の俎上にのせたのは、飲酒運転問題を論じた医学論文である。まず、ガスフィールドは、当該論文が「アルコールの影響下にある運

転 (driving while under the influence of alcohol)」という問題に言及する際に、「酔っばらい運転者 (酒に呑まれた運転者; drunken driver)」という指示表現を選択していることを指摘する。飲酒運転問題は、運転者だけではなく、同乗者や飲食店の問題でもある。だが、この指示表現の選択は、飲酒運転問題の全体を一部の行為者 (agent) の問題へと還元する (本稿では集中的に論じていないが、これはメトニミーの分析になっている)。

飲酒運転問題への対策としては、しばしば厳罰化が主張される。だが、当該論文は厳罰化には効果がなく、むしろ治療が必要であることを主張する。なぜなら、厳罰化は、行為者が自己利益を合理的に計算できることを前提にした対策であるが、治療の対象となるような「酔っばらい運転者」は、そもそもそのような合理性を欠いているからである。

当該論文のこのような主張は、医学論文だけあって医者からの立場からなされたものである。だが、この論文が読者に対して十分な説得力を持つためには、解決しなければならない問題がある。それは、多くの読者には、飲酒の経験 (場合によっては酒気帯び運転の経験すら) があるため、医者からの立場から下される「酔っばらい運転者」への処方箋は、あらぬ反発を招くおそれがあるからである (図3)。

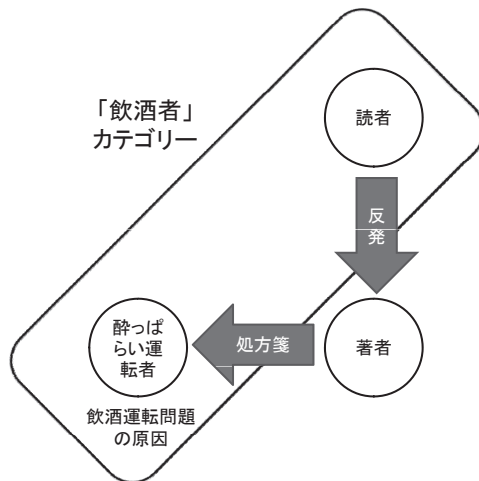


図3 ガスフィールドによる飲酒運転問題の分析①

そこで、当該論文が活用したのが、病理学的 (pathological) なメタファーであった。つまり、飲酒運転問題の原因となるような「酔っぱらい運転者」が、ひどく「病的」であり、「われわれ」とは異質であることを強調する述定表現を体系的に選択することで、「飲酒者」カテゴリーと「たしなむ程度の飲酒者 (social drinker)」カテゴリーを分離し、当該論文の著者と読者が「おなじ」側になるようなカテゴリー化を果たしたのである (図 4)。

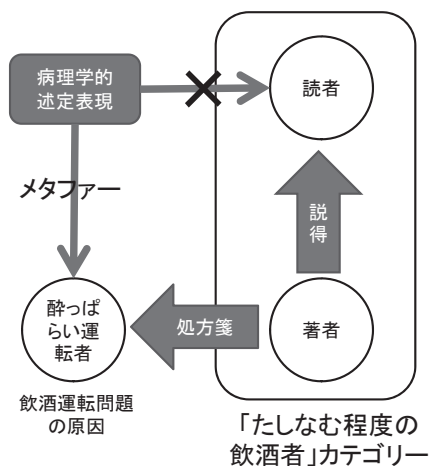


図 4 ガスフィールドによる飲酒運転問題の分析②

このとき読者は、「酔っぱらい運転者」への処方箋は自らに向けられたものではないものとして、安心して著者の議論に付きあうことができる。こうして、当該論文の説得力は、メタファーによって担保されているというのが、ガスフィールドの分析結果である。

以上のようなガスフィールドの研究は、文芸批評家 K・バークのレトリック論 (Burke [1950] 1969) における「同一化 (identification)」の概念を応用したものである。バークは以下のように述べている。

……多くの「転義」や「文彩」のうち圧倒的に多くのものが、純粹に（内

容とは関わりのない) 表現形式の承認への招待ともいうべきものである。これらを詳細に分析するのがここでの目的ではない。原理だけを確認すれば十分である。それは、ある命題表現において、こうしたレトリカルな形式のいずれを選ぶかということが、「同一化」とおおいに関係しているということだ。(Burke 1969: 59 = 2009: 108 [訳文を一部修正])

議論において、論者が聴衆を首尾よく説得するためには、論者と聴衆が「おなじ」側になるよう同一化されている必要がある。ところが、定義上、この同一化は、論者と聴衆が主張(命題内容)を共有するよりもまえに(つまり論者が聴衆を説得するよりもまえに)達成されなければならない。では、主張を共有することなく、論者と聴衆をあらかじめ「おなじ」側にカテゴリー化するものとはなにか。バークが示唆したのは、命題の内容ではなく形式の共有、つまり、命題表現のレトリックである転義の共有が、その機能を果たするということであった。そして、ガスフィールドの研究は、転義のなかでもとりわけメタファーの体系性が、同一化の機能を果たすことを示したのである。

前節では、メタファーの体系性が、語り(主題について語られる／語られないことを選択)という機能を持つことを指摘した。一方、バークとガスフィールドが論じた同一化とは、主題について語る「われわれ」のカテゴリーに、だれが含まれ／だれが含まれないのかを選択することである。そこで本稿では、メタファーの体系性が持つ同一化の機能を、「メタファーによる語り」と区別して、「メタファーによる示し」と呼ぶことにする。

メタファーによる示しの分析は、前節で検討した批判的メタファー分析に比べて、より「社会的」であると言えるだろう。批判的メタファー分析では、メタファーによる語りの、イデオロギー的な背景・効果が分析される。このとき、メタファーは、あらかじめ成立している社会関係を事後的に反映する指標という位置づけになる。一方、メタファーによる示しの分析は、メタファー抜きでは成立しえない社会関係に照準するものなのである。

5 結論：今後の課題

以上本稿では、メタファー分析がどのような意味で「社会学的」でありうるのかを検討した。はじめに、メタファーの定義を検討したうえで（第2節）、批判的メタファー分析の枠組を紹介した（第3節）。そして、メタファー分析の社会学的な意義とは、メタファーによる語りの分析を通じて、社会集団間のイデオロギー的なコンフリクトを解明することである、という答えを暫定的に導いた。だが、この答えは、メタファー分析に副次的な意義を与えるものでしかなかった。そこでつぎに、バークのレトリック論を応用したガスフィールドの研究に目を転じ、メタファーによる示しの分析こそが、「社会学的」なメタファー分析であるという結論にいたった（第4節）。

序論でも述べたように、日本の社会学者は、これまであまりメタファーに関心を持ってこなかった。その理由はいくつか考えられるが、ひとつには、メタファーが「単なる」表現形式の問題ととらえられているからであろう。だが、バークやガスフィールドが示唆しているのは、「単なる」表現形式であるからこそ拓かれる社会関係がある、ということなのである。

とはいえ、メタファーによる示しの分析は、いまだ緒についたばかりである。今後は事例研究を積み重ねることで、メタファー分析の社会学的な意義をより具体的に示していきたい。

[注]

- 1) これまでにも筆者は、折にふれてメタファーについて論じてきた（林原 2005, 2006, 2008, 2011b）。本稿はその内容をまとめたうえで、そもそもなぜメタファーに着目するのかを再検討したものである。
- 2) この定義の問題点は、「おなじ」命題の「異なる」表現であることをいかに判断するかという点にあるかもしれない。だが、その判断は当事者に委ねればよいだろう。中絶されるのは「胎芽」か「胎児」かという争点は、研究者ではなく、中絶論争の当事者が分節化したものである。
- 3) ガスフィールドの原論文は、ポストモダン思想の色彩が強く、きわめて読みにくいものである。そのため、構築主義の社会問題論においてレトリックに着目した研究のなかでも、これまであまり参照されてこなかった。そこで、本稿では、ガスフィールドの中心的な着想を再定式化しつつ、その要諦を紹介するよう試みた。ときに「改釈」が含まれるか

もしれないが、読者の寛恕を請う次第である。

〔文献〕

- Burke, K., [1950] 1969, *A Rhetoric of Motives*, Berkeley: University of California Press. (= 2009, 森常治訳『動機の修辞学』晶文社.)
- Charteris-Black, J., 2004, *Corpus Approaches to Critical Metaphor Analysis*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Condit, C. M., 1990, *Decoding Abortion Rhetoric: Communicating Social Change*, Urbana: University of Illinois Press.
- Gusfield, J. R., [1976] 2000, "The Literary Rhetoric of Science: Comedy and Pathos in Drinking-Driver Research," *Performing Action: Artistry in Human Behavior and Social Research*, New Brunswick: Transaction, pp. 31-60.
- 橋元良明, 1989, 『背理のコミュニケーション——アイロニー・メタファー・インプリケーション——』勁草書房.
- 林原玲洋, 2003, 「S. Toulmin の議論モデル・再考——相互行為としての論争／規範としての論理」『現代社会理論研究』13: 204-14.
- , 2005, 「論証と文彩——レトリック論のふたつの系譜と構築主義の社会学」『現代社会理論研究』15: 85-97.
- , 2006, 「論証役割とメタファー——レトリック分析の社会的可能性に関する一考察」『先端社会研究』4: 475-97.
- , 2008, 「議論と論争のレトリック分析——論法・メタファー・論証役割」東京都立大学大学院 社会科学部研究科 平成 19 年度 博士論文.
- , 2010, 「論争における問題設定の『ずれ』——筒井康隆『無人警察』をめぐる論争を事例として」『年報社会学論集』23: 141-52.
- , 2011a, 「『レトリックを使う』とはいかなることか——媒介的価値の適及的な分節化」『人文学報』437: 95-126.
- , 2011b, 「差別表現とメタファー——容器・武器・鏡・自然としての言語」『新記号論叢書セミオトポス』6: 211-27.
- Jakobson, R., 1963, *Essais de linguistique générale*, Paris: Éditions de Minuit. (= 1973, 川本茂雄監修『一般言語学』みすず書房.)
- 厚東洋輔, 1991, 『社会認識と想像力』ハーベスト社.
- Lakoff, G., 1996, *Moral Politics: What Conservatives Know That Liberals Don't*, Chicago: University of Chicago Press. (= 1998, 小林良彰・鍋島弘治朗訳『比喩によるモラルと政治——米国における保守とリベラル』木鐸社.)
- Lakoff, G. & M. Johnson, 1980, *Metaphors We Live By*, Chicago: University of Chicago Press. (= 1986, 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳『レトリックと人生』大修館書店.)
- Musolf, A. 2006, "Metaphor Scenarios in Public Discourse," *Metaphor and Symbol*, 21 (1) :

23-38.

NHK, 2010, 「首相 “本免許へ” と政権意欲」, NHK ニュース, (2010 年 12 月 13 日取得,
<http://www3.nhk.or.jp/news/html/20101213/k10015802171000.htm>).

Pragglejaz Group, 2007, "MIP: A Method for Identifying Metaphorically Used Words in Discourse," *Metaphor and Symbol*, 22 (1) : 1-39.